

古希を迎えた先生方

古希を迎えて

ホワイティうめだ眼科クリニック 細谷 比左志

自分ではいつまでも若いつもりでしたが、いつの間にか70歳を過ぎていて、この度大阪市北区医師会会誌の編集委員会の方から、今回のような文章の依頼を頂き、改めて自分がそんな年齢に達していたのだと気付かされました。

いい機会ですので、自分が歩んできた人生を少し振り返って見るのもいいかなと思います、この文章を書いています。私は昭和26（1951）年3月生まれで、今年の3月で70歳となりました。私の人生は、小中高の学生時代を除くと、前期の建築時代と後期の医学時代とに分かれると思います。前期は、18歳から28歳までの10年間で、後期は28歳から現在に至るまで42年数ヶ月と後期の方が長くなっています。

【前期】建築時代

高校3年生の時点で将来の自分の職業をどうするか、おおよその人生の軌道を決めて大学受験に向かうのですが、その時には、経験も何もないわけで世間のことはあまり分からずどのようにするのがよいのか分からないわけです。自分の興味や性格を考えると文科系よりは理科系が向いているのは分かっていますから、高校3年生のクラス分けの時は理科系のクラスでした。でも理科系と言っても将来はどうしたいのか、どうするのが良いのかなど、まだ人生経験もなくまったく分からない訳です。しかし父親の強い勧めもあり、大学受験は工学部建築学科を選ぶことにしました。父親は、建築士でもなんでもないので、どうもそういう世界に憧れを抱いていたようです。父の口癖は『つぶしの効く職業を選べ』でした。父親にとっては建築士は、つぶしの効く職業の代表だったようです。眼科医となつた今では、医師も立派なつぶしの効く職業だと思つていますが、また医学部も少しいいのかなとは当時思いましたが、父によると医学部は医師になるまでに時間がかかるので、ダメとのことでした。確かに、他の学部より2年長いので、そういう考えもあるのかなと思います。

また世の中はちょうど、1970年の大阪万博の始まる直前でもあり丹下健三氏や黒川紀章氏などの有名建築家が盛んにマスコミなどに取り上げられていました。いわゆる建築ブームです。また建築学科は工学部の中でも芸術的要素もあると大学の学部紹介のガイドブックに記載があったこともあり、とても魅力を感じ大学受験は工学部建築学科を受験することにしたのです。時は1969年（昭和44年）の春です。皆さんの中にはご存じの方は少なくなりましたが、学生運動が激しかった頃で、丁度、東京大学の安田講堂が占拠された事件がありました。私は高校3年生の冬で受験勉強の真っ最中。テレビでその模様を見ていました。それで何と、その年の東京大学の入試は中止されることになってしまったのです。私は東京大学を目指していましたが、急きよ志望先の変更を余儀なくされ、京都大学工学部建築学科を志望先にしました。当然ながら東大を目指していた全国の学生達と同じように志望先を京都大学や他大学に変更しましたから、その時の競争率は上がり合格点も相当上がったのはいうまでもありません。志望大学は順繰りに下げられ当時大阪大学も相当合格点は上がったと聞いています。

大学紛争の影響は、京都大学でもあり、いつもなら入学試験は大学本部のある左京区の吉田という所で行われるのですが、この年は宇治の方にあるグラウンドに臨時のプレハブ校舎が建

てられて試験はそこで受けたわけです。とても寒かったのを記憶しています。そのようなことがありましたが、無事入学試験に合格し、大学生活が始まりました。でも入学しても最初の内は大学紛争の影響が残っており、通常の授業はまだなく、大学の校門のところには、机や椅子が積み上げられてバリケードになっており、校門周囲を歩くと催涙ガスのおいがそこら中に充満していて目がとても染みた覚えがあります。授業がないので、仕方なく空いた時間を利用して北海道旅行に出かけました。ユースホステルを利用しての貧乏旅行です。これも今となっては良き思い出です。ヒッチハイクで旅行しているスイス人と知り合ったりもしました。

その年の秋にはようやく授業が始まり、本来の大学生活を送ることとなりました。大学の最初の2年間は教養課程といって、一般的な教科の勉強で、建築の専門的な科目は3回生から始まります。語学は英語はもちろんのこと、第2外国語を選ぶのですが、私はフランス語を選択しました。同級生はドイツ語を選ぶ人が多かったのですが、フランス語の方がおしゃれな気がしたので。将来、留学するのにもいいのかなと漠然と思った記憶があります。実際、フランス語には力を入れ、大学のすぐ向かいにある関西日仏学館というところでフランス人によるフランス語講座が行われていたので、そのコースに入りました。フランス語は上級まで終えましたが、その後、イタリア語を勉強

していくなかで、フランス語はどんどん忘れて行ってしまう。残念なことです。どうも私の頭の中の語学の引き出しは、一つの外国語の引き出ししかないように感じます。というのもフランス語を一生懸命に勉強していくとそれと引き換えに英語を忘れていき、またイタリア語を勉強すると折角身に付いたフランス語を忘れていくという感じです。ただフランス語を勉強して良かったと思うのは、イタリア語を勉強する時に、フランス語と同じラテン語系の言語なので、単語そのものや文法構造が非常によく似ているので、その点は楽であったと思います。

いずれにせよ、大学院の修士課程の時に1年間だけイタリアのヴェネツィア建築大学に留学するのですが、その時の経験、そしてイタリア語を勉強していたという事実の証拠みたいながほしいと思い、だいぶんあとの平成27年（2015年）2月にイタリア語通訳案内士の資格を取りました。1次、2次と試験があり、2次試験は東京で行われ口頭試験で結構難しかった記憶があります。今のところガイドの仕事はしていませんが、将来何らかの役に立つかもしれないですね。そして2次試験の時に、全くの偶然ですが『岐阜県白川郷の合掌造り』と『世界最大の木造建築物』という建築に関連するテーマがあり、過去に建築を学んだことのある自分にとり少しラッキーであったかなと思います。

イタリア留学の時の成果として修士論文…「イタリアの山上市」をまとめました。これはイタリアの中部地方に小高い丘や山の上に城壁をめぐらした都市が多くみられるので、それについてまとめた論文です。この珍しい山上市のできた理由としては、①外敵からの侵入を防ぐ目的や、②低湿地帯には蚊が発生しマラリアなどの病気が多く、より乾燥した土地を求めて山や丘の上を住居に選んだという説があります。丘の一番上には教会が建てられその鐘楼が高くそびえ、シルエットがとても綺麗です。日本にはない風景です。

イタリア留学も終え、大学院修士課程も修了した25歳の春に、大阪の某建築設計事務所に就職しました。最初は、大きな仕事は任せられず、建物の一部、例えば階段やトイレなどの図面を引くなどの仕事です。当時はCADのような優れた製図のためのコンピュータソフトはなく、もちろん鉛筆による手書きです。あと構想だけですが、円筒形の上下の円部分を少しだけ振じった形の駐車場の設計構想に携わりました。この形は、ヨーロッパに多いのですが、円筒形で中央部がすこしくびれた形で、火力発電所に多く採用されている形状で、これを駐車場に応用するというのは、面白い発想でした。残念ながら実現にはいっていませんでした。あと入所1年目に1級建築士の資格試験を受け合格しました。この資格は今も有効ですが、使ってはいません。もったいないことはありません。

私の在籍していましたこの設計事務所は、その後経営があまり思わしくなくなり給料の遅配などが発生し、また仕事をしていく上で、自分の人生設計をもう一度見直そうという気持ちがあり、その結果、医学の方への興味が強くなり、また結婚を機に岳父の仕事ぶり（眼科で開業していました）を実際に見たこともあり、医学部に入り直そうという気持ちから、1978年の9月末で設計事務所を退職し、10月から受験勉強を再開しました。以上が前期の建築時代の10年間ですが、今から思うと密度の濃い10年間だったように思います。

#### 【後期】医学時代

ここからは、後期の医学時代が始まりますが、まず医学部に入学しないとけません。受験勉強をするのは実に10年ぶりでありどの科目もすっかり忘れていてそれを思いだすことから始めました。自分の卒業した高校（大阪府立高津高校です）を訪問し担任だった奥山先生に事情を説明して高校の教科書を分けて頂いたりしました。医学部に入りたいという希望があったのなら相談してくれたらよかったのと言われましたが、当時は建築の方に目が向いていましたので、仕方ありません。また予備校（京都の駿台予備校です）にも行きましたし、Z会（大学受験用の通信講座）にも入りました。Z会は高校生の時も利用していたので、その有用性は理解していました。またその年か

ら共通一次試験が始まるという年で、準備期間は実質3か月とあまり長くなかったです。勉強するうちに少しずつ思い出してきました。また国語などは、高校生だった時より人生の社会勉強をしたせいか成績が上がりました。色々な文章を読んだり経験を積んでいるためか読解力が非常に上がっていると自分でも感じました。医学部は6年間の過程ですが、大阪大学はちょうど学士入学制度といるのがあって、教養課程の2年間で免除できるので、私のような少し年齢が上（当時28歳）の者にとっては非常にありがたい制度です。下からの通常の入学試験も受け、学士入学制度の方の試験も両方受けるようにしました。学士入学試験の方は、試験についての詳しい情報がまったくなく、過去問は発表されておらず試験科目だけの情報でしたが、幸い合格することができました。6年間の普通の入学試験は私立と国立と両方受かっておりましたが、一番最後に行われた学士入学試験に運よく合格しましたので、前者は辞退いたしました。

学士入学制度ですので、大学の3回生の専門課程から始まるわけです。教養課程から上がった学生は100人で、私みたいな学士入学は20人、合計120人の大所帯でした。学士入学の学生は、その出身大学も様々であり（東大と京大が多かった印象あり）その学部も様々でした。理科系学部だけでなく、経済学部出身の方もおられました。また教養課程から上がった

きた学生の中には、一旦他の大学を卒業してから、また医学部に入り直した方もいました。

私自身、人生2回目の学生生活で、随分張り切っていたように覚えていきます。当時の阪大の医学部は中之島にあり、最寄り駅は環状線の福島駅でした。電車で福島駅まで行き、そのあとは歩いて通学です。専門課程の最初の2年間は戦前からある中之島の古びた校舎（今はもうありません）で授業です。その後、中之島の北側の川向にある附属病院内にある教室に移りました。この建物も今ではもう取り壊されていて、現在は「ほたるまち」と名前が変わり、朝日放送などが入っている複合施設になっています。阪大医学部附属病院は平成5年に吹田キャンパスの方に移転したのです。

2度目の学生生活も無事4年で終わり昭和58年（1983年）の春に卒業。専門を決めなければなりません。そして入局です。私は当時眞鍋禮三先生が主宰されていた眼科学教室を選びました。眼科を選んだ理由は、まず早くに専門性が得られるという点があります。私のようにすでに同級生より6〜8年も年を取っている者にとつては、時間が貴重であり1年でも早く一人前になれるという点が魅力的でした。また顕微鏡手術を早くから導入しているところが魅力的でした。また頭微鏡手術を早くかなることが好きな私にはうってつけだと思いますし、実際眼科で手術をする時には、前もって切開の位置や長さ、方向などのデ

ザインがあり、それを実際に行っていくので、少し建築のデザインと施行に似たところがあるように感じます。また岳父の仕事ぶりを間近で見ていたというのも理由の一つにあるかもしれません。入局のあとに、医師国家試験があり、無事合格。4月5月は見習いのような仕事をし、6月から正式の医師としての勤務です。大阪大学医学部附属病院で研修医としての勤務が始まりました。附属病院での勤務は2年間ほどあり、その後、法円坂にある国立大阪病院（現在の国立病院機構大阪医療センター）での勤務です。この時は、田野保雄（後の阪大教授）先生が医長として国立大阪病院に出るとときに一緒に勤務するものとしてお声をかけていただいたのです。のちに大阪医科大学教授になられた池田恒彦先生も一緒です。田野先生もとてもし張り切っておられ、『国立大阪病院を日本一の眼科にしよう』が合言葉でした。眼科学の対象は眼球という小さい器官ですが、それぞれのパーツごとに専門が分かれており、私はその中でも角膜に一番興味を惹かれており、角膜を専門にしようと思ったのは、この頃でした。ボスである田野先生のご専門は網膜・硝子体であり、なかでも糖尿病網膜症による難治性の網膜剥離の患者が全国から紹介されてきていました。その治療に硝子体手術が施行されます。しかしこういう患者は手術後に角膜上皮障害を生じることが多く、その治療は私の担当となります。糖尿病網膜症は有名ですが、糖尿病角膜症もあるのです。アルドー

ス還元酵素阻害剤の点眼剤であるC<sub>1</sub>-112の治験も担当しておりました。この点眼剤は、非常に有効で、その効果については色々な学会でも発表致しました。しかし残念ながら、実際の製品としての発売にまでは至りませんでした。その他、糖尿病角膜症の一種である再発性角膜上皮びらの治療に「角膜表層穿刺」という方法を、日本で初めて導入し有効性を発表しました。この方法は、糖尿病が原因でなくても、他の原因の再発性角膜上皮びらの治療にも非常に有効です。

ある日、角膜ヘルペスが原因で著明な角膜混濁のため視力低下を起している患者さんが、小生のところに回ってきました。一度混濁してしまった角膜はそのままでは透明にはなりません。治療法は全層角膜移植しかありません。研修医時代に眞鍋先生が角膜移植手術をなさるのを助手として横で見えておりましたが、術者としてするのは初めてです。当時関西労災病院におられた大橋裕一先生（後の愛媛大学教授）に助手についていただき手術をしました。当然、移植する角膜は、今も大阪大学のキャンパス内にあります大阪アイバンクから提供を受けました。手術は無事終了し、この方は幸運なことに術後視力も裸眼で1.0の視力を得ました。ビギナーズラックという他ありません。この方以外にも、何人もこの患者さんの角膜移植を担当させていただきました。当時大阪労災病院におられた木下茂先生（後の京都市立医大教授）のご指導を仰いだこともあります。今から

考えますととても素晴らしい先生方のご指導を仰げ、恵まれた環境であったと思っております。また、当時、国立大阪病院、大阪労災病院、関西労災病院の3病院のメンバーが集まって、月1回程度小さな症例検討会を行ってその見聞を広めておりました。その症例検討会は、「国労カンファレンス」と名付けていました。その幹事役を務めさせていただいておりました。このような会も非常に勉強になったように思います。

その後、関西労災病院勤務を経て、平成2（1990）年10月に大学に助手として戻りました。眞鍋先生が大学助手に呼んで下さったのです。大学での担当はもちろん角膜です。当時は大阪大学は福島にあり（前述の通り）、角膜グループには、眞鍋先生を筆頭に、前述の木下・大橋両先生、下村嘉一先生（後の近畿大学教授）、井上幸次先生（後の鳥取大学教授）、濱野孝先生（ハマノ眼科）、前田直之先生（湖崎眼科）ほか錚々たる先生がおられました。角膜移植手術も随分と担当させていただきました。

その後、機会がありアメリカのカリフォルニア大学デービス校への留学が決まりました。平成5年（1993年）の夏に渡米しました。アメリカでの指導教官はMark J Mannis先生とIran Schwab先生です。研究テーマは糖尿病角膜症で、前述したアルドース還元酵素阻害剤点眼（C<sub>1</sub>-112）の糖尿病患者角膜への効果の検討です。角膜上皮細胞をタンデム共焦点顕微鏡

を使って観察するという臨床研究です。病院はカリフォルニア州の州都のサクラメント (Sacramento) 市にあります。私の留学期間は2年で、最初の1年は単身赴任でサクラメントの隣町のデービス (Davis) に住みましたが、後半の1年は妻と次女も来てくれてサクラメント市内の安全な地域内のアパートメントに住みました。住居費は同じカリフォルニア州でもサンフランシスコやロスアンジェルスのような大都市と違って比較的安く助かりました。アメリカでも色々な症例を見たいと思い、ボスの Mannis 先生にお願いして先生の診察されている患者さんを一緒に診せて頂いたり、Grand Round という会に参加させていただいて色々な珍しい疾患の患者さんを診る機会もあり得難い経験をしました。また変わったところでは、大学の本部 (デュービスにあります) には獣医学部があり、獣医学部にも眼科があり人間の眼科と動物の眼科で交流があつて、獣医学部の眼科の患者 (犬や馬など) の診察ができたことは得難い経験の一つです。犬や馬でも患者のことを patient と呼んでいて面白いと思えました。当時、アメリカではすでに犬の白内障手術も行われていて、今では当たり前になっている眼内レンズも移植されていました。

色々得難い経験をしたアメリカでの留学生活も2年で終わり、平成7 (1995) 年夏に帰国しました。帰国後すぐに、眞鍋禮三先生のと阪大教授になられた田野保雄先生から大阪

府立病院への勤務を命じられました。大阪府立病院には、平成13 (2001) 年末まで眼科部長として在籍していましたが、色々な症例を経験しました。自分の専門外である硝子体出血、網膜剥離、黄斑円孔の手術も経験しました。思い出に残るのは、眼科医がその一生で一人出会うかどうかといわれるほどの頻度である先天緑内障の赤ちゃんを診断し、治療させていただいたことです。眼圧は両眼とも40 mmHg 以上と上昇しており角膜は浮腫状で混濁しており特徴的な内皮面の曲線的な裂け目の所見を伴っていました。すぐに手術が必要で、両眼のトラベクロトミーを施行致しました。手術は無事成功し、眼圧も正常化しました。その後、この赤ちゃんは成長し視力も裸眼で両眼とも1.0 となっています。角膜には内皮側のデスメ膜の破裂痕である Haab's striae と呼ばれる所見が残っていて内皮細胞密度も通常より少ないので、ずっと経過観察が必要で、成人になった今も診察させていただいております。先天緑内障の治療はもちろん初めてだったので、当時奈良の天理よろず相談所病院におられた永田誠先生に電話でしたが、診察のポイントや術後経過など細かく教えていただき非常に助かった思い出があります。

その後、平成14 (2002) 年1月から1年3カ月と短期間でしたが、角膜移植センターのあった大手前病院に在籍。数多くの角膜移植術を施行しました。アメリカからの輸入角膜を使つての角膜移植であり手術日を前もって計画できるメリット

があります。また当時、世に出始めたばかりの深層層状移植術（DALK）も行いました。これは内皮細胞は患者自身のものを残すので、移植後の拒絶反応が圧倒的に少ないというメリットがあります。

その後、平成15（2003）年4月からは、市立豊中病院眼科部長として平成23（2011）年7月までの8年あまりを過ごしました。北摂地域の中核病院として、豊中市はもちろんのこと近隣の池田、箕面、吹田、川西市から患者さんを多数紹介して頂き、とても多忙な毎日でした。それこそ白内障手術三昧（週3回手術日）といった毎日だったと記憶しています。角膜の興味深い症例も多く経験し症例発表にも事欠かない状態でした。このことは大阪府立病院時代も同様でした。ただあまりに多忙だったため、精神的に参ってしまい、少し燃え尽き症候群のような状態になりましたので、60歳というときに市立豊中病院眼科部長を辞することになりました。

ただ全く仕事を辞めるということは考えておらず、仕事のペースを少しダウンすることを考えておりました。その時に、娘（長女）が勤務しております兵庫医科大学の眼科教授をしておられた三村治先生のご紹介で、社会保険神戸中央病院（現在のJCHO神戸中央病院）での勤務をすることになったのです。一人部長ですが、マイペースで勤務できる内容で、多くの器械をそろえていただけという好条件でした。手術も週1回の日

帰り手術となりました。この病院には、平成23（2011）年8月から平成31（2019）年4月まで8年弱の間勤務しました。とても快適に過ごさせていただきました。

そして新しい年号となりました令和元（2019）年6月1日からは、今も勤務しております『ホワイティうめだ眼科クリニック院長』として診察を開始したのでございます。それまではずっと病院眼科の勤務医としての生活だったのですが、現在は一開業医としての勤務です。手術が大好きな私にとり手術ができないという一抹の寂しさはありますが、詳しい診察により的確に診断し、最適の治療法を選び、そしてその治療効果を見るところという流れは今までと同じであり、疾患を治療したという喜びは患者さんと分かち合えるものです。

今後も患者さんにとって分かりやすい言葉で丁寧に説明する。そして納得していただくという流れは続けたいと思っています。

今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。